衝撃とともに加夏子は操舵席から放り出された。
舷側に打ちつけられたのも構わず、がばっと身を起こす。

舳先に倒れこんだ人影が見えた。
夢中で這い寄ろうとすると、船の床がぬるりと滑った。

血溜まりに浸かった北山は目を開けたまま動かない。

「北山さんっ！　ついたよ、しっかりして！　なんかいって！！」

身体をゆすり、頬を張ってみたが反応が無い。
どう見ても死んでいた。

仰向けに転がし北山の胸板に耳を当てた。
微かに鼓動が聞こえる。
わずかだが胸も上下していた。

いきてる
息してる
まだ助かる

そのまま起き上がり、舷側のへりに手をかけて下を覗き込んだ。
小さくせわしない波が座礁した船の脇腹をひっきりなしに叩いている。
暫く、波の欠片を眺めていた。

いく

呟き、暗闇の向こう側へ身を躍らせた。

◇

たいしたことない距離が無限のように思えた。
もう何度も溺れかけ、海水をしこたま飲んでいた。
気持ち悪くて吐きそうになりながら、それでも浜らしき方向へ水をかく。
すぐ脇に防波堤が続いていたが、そこへ這い上がる腕力も足も無かった。
張りつめていた気が、ベキベキと音を立てて折れかかっていた。

もうヤダ、もういけない
誰か助けて
御願い…おねがい…

いいや
もうやめた
むりだよ、こんなの
しんじゃったほうがいい…

あと、いっかい
あとひとかきしたら、やめる
ゴメンね、パパ、ママ
ヨシオ、北山さん

ジュン…

何かか指先を掠めた。
触ろうとして、また波に飲まれ盛大に海水を飲んでしまった。

砂
すなだ

もみくちゃにされながら、それでも必死に水をかき頭をあげて前を見た。
海岸がすぐそこにあった。

◇

気が付くと、浜にべったりと横たわっていた。
不意に吐き気に襲われ、俯せになり凄い量の海水を吐いた。
それで頭がしゃっきりした。

沖へと目を向けると、様子を伺っていた二艘の船がこちらへ近付いてきていた。
男が一人、海へ入ってロープを引きずっている。

つかまる？
冗談じゃない！
みんなを助けなきゃ…アタシがいかなきゃ…

必死に砂を掴み前へと這いずる。

もっと…
もっとはやく！
もっともっとはやくっ！！
おそいぞクラァ～！！！！！

加夏子は気がついていなかった。
自分がいつの間にか、四つ足で砂を蹴っていた事を。

◇

防波堤へと続く波乗り道路へ鋭くハンドルを切り込んだ真山は、数秒も経たずブレーキを蹴り込んだ。

海上で不規則な動きを繰り広げていた小さな漁灯を横目で追いながらここまで来た。
先頭を走っていた灯りの１つが沖へと伸びた防波堤の端にぶつかるように止まった時、猛然とスピードを上げて突っ込んでいったのだ。
さえない色のブルーバードが、低く茂った草むらに頭を埋めて止まる。

安全ベルトを跳ね上げ、蹴り飛ばすようにドアを開けた。
凸凹に前輪をとられ、つんのめるように傾いた車のドアは引っかかって半分しか開かなかったが、飛び越えるように外へ出た真山はすぐさま走り出した。

朧気に船の形が見えた。
北山が乗っている事を真山は疑わなかった。

あんな無茶な繰船をこんな真っ暗闇でやらかすのは一人しかいない
それだけの危険を犯すのなら、あの船に清水加夏子が一緒に乗っている可能性が高い
急がなきゃ

草地が砂に変わった。
足が酷く重く感じる。
後から来たもう一艘が、浜の近くまで寄せてきて男を一人降ろすのが見えた。
恐ろしく遠く感じていた距離が、ぐんぐんと縮まってきていた。
船上で棒のようなものを構える姿まで見える。

銃か！？

膝を折り砂浜に伏せようとした刹那、黒い塊がもの凄い勢いでぶつかってきた。
さすがの真山が、へたり込むように砂地へ尻を落とした。

「…真山…さん？」

塊が声を発した。

「君は…加夏子ちゃんか？」
「ヨシオが…北山さんが…早く、はやくしないとっ！」
「きみ…あ…足…アシ…」

恐らくは切羽詰まった状況にも関わらず、真山は呆けたように加夏子の足を指さしていた。
挑みかかるように真山にしがみついた加夏子は、腕を、肩を掴んでにじり上がり、座り込んだ真山の視線の上へと身体をずりあげた。真山を見下ろし吠えるように訴えかける。
何度も、何度も。

「早く、はやく！　はやくぅー！！」
「わかった！　判ったから落ち着け！！」

なだめる彼の耳元を何かがかすめた。

パン

間の抜けた炸裂音がすぐ後に続いた。
銃声に我を取り戻した真山は、半立ちの加夏子を抱え倒すように砂浜へ身を伏せ激しく言い放った。

ここにいろ、動くなよ！

◇

海水が、真山から神速の足を奪っていた。
腰近くまで海につかりながら、重い身体をしゃにむに近い方の船へと押し出していった。
飛んでくる弾丸は、身体を掠めたかと思うとひどく遠くに水飛沫を立てた。

あたったら運が悪いと思え

すぐ目の前で傾いて停まっている船にたどり着く、ただそれだけを真山は念じ続けた。
幸い追っ手とは反対側にかしいでいる船の横腹に手がかかる所まで来ると、彼は舷側からズルズルと這い上がった。姿勢を低くして追っ手の方を伺う。
男が更に数人、船から降りてくるのが見えた。
膝立ちに近い姿勢のまま、真山は素早く船首へと回り込んだ。反対側の船縁近くに人影が１つ。
横たわったままピクリとも動かない。

「北さん！　真山です、やられたんですか？　北さんっ！！」

返事はない。

「北さん、しっかりして下さい！　きた…さ…！？」

虚ろに開かれた目が真山を見ていた。
何も見ていない目であった。

空気がコンクリートと化した。
自分の息が止まっているのを真山は不思議な気分で感じていた。

まただ
また、死んだ
おれはどれだけ死体を視りゃいいんだ
おれは…おれは…

派手な水音を立てて男達が近寄ってきた。
手に手に棍棒やらナイフやらを握っている。

真山は棒立ちになっていた。

「おぅクラッ！　てめぇは何だ！　おんなをどこやった！　あぁ！？！」

真っ先に船へ上がってきた大柄な男が、右手の手斧を振りながら肩をいからせ真山に詰め寄った。

ゆっくりと真山が顔をあげた。

上背はそこそこだが細身の彼を『たいしたことない相手』と見てくってかかった男は、一生を後悔して過ごす羽目になった。

人差し指と中指が、眼球へ。
左の低い蹴りが、右膝関節へ。
右手首が奇妙な形に折り畳まれ、首にぐるりと巻かれる。
そのまま顔面から床へ。

何が起こったか判らぬまま、男は残りの人生を病院のベットで過ごす不具者に一瞬で成り果てた。
後から上がってきた破落戸どもが怯む。

暗闇の底で、真山の双眼が怪しく光っていた。

◇

海の上では、怒号も悲鳴も煙のようにかき消される。
一方的な虐殺が終わるまで、幾らも時間はかからなかった。